

## 日本語における「遊離数量詞の 関係節化」について\*

田 中 秀 毅

### On “Relativization of Floating Quantifiers” in Japanese

Hideki TANAKA

#### Abstract

It is generally accepted that adverbs are verbal elements, and hence cannot be modified by relative clauses. Eguchi (2002) claims, however, that Japanese arguably has a structure that allows so-called floating quantifiers with an adverbial property to undergo relativization. The purpose of this paper is to describe the syntactic and semantic features of this kind of relative clause. I follow Eguchi in arguing that the

---

\* 本稿は2003年10月18日に広島女学院大学で行われた広島言語文化談話会で口頭発表した内容に大幅な加筆と修正を加えたものである。忌憚のないコメントを頂戴した会の参加者に感謝したい。また、別な機会に助言と示唆をいただいた、広島大学の吉田光演先生、同大学大学院生の橋本将氏と田中雅敏氏、筑波大学の加賀信広先生、新潟大学の本間伸輔氏に記して感謝の意を表したい。日本語のデータについて貴重なご意見を頂いた修道大学の小林亜希子氏にも感謝申し上げる。当然ながら、本稿の不備はすべて筆者の責任によるものである。なお、本研究は平成14~16年度科学研究費補助金の援助を受けて進めている研究(課題名:「日英語における数量詞と関係節の相関に基づく両者の統語的・意味的特徴について」(科研費14710349))の成果の一部である。

relative clauses in question differ from ordinary ones in that they take a “scale expression” without a concrete cardinal (e.g. *kazu* (‘number’) and *ryou* (‘quantity’)) as an antecedent, whereas ordinary relative clauses take an entity-denoting expression as an antecedent. I thus refer to the former type as “number/quantity-restricting” relative clauses, and to the latter type as “entity-restricting” relative clauses. My conclusion is that the *raison d’être* of the “number/quantity-restricting” relative clause construction is to count either the number of eventualities denoted by the relative clause or the quantity of entities involved in the eventualities and accumulated through those eventualities.

## 1. は じ め に

「名詞修飾要素は副詞を修飾できない」という一般化は、品詞論的に副詞が名詞とは対照的な性質をもつことからごく当然のこととして受け入れられている感がある。このことは、日本語の文法研究の初期段階において、奥津（1974）が以下に示す記述的な考察を行っているのを除けば、とりわけ深く議論されないまま現在に至っていることから伺える。

- (1) a. 川が 静かに 流れる。  
 b. \*[川が流れる] 静か ([ ] は関係節)

奥津は (1a) から (1b) のような連体修飾構造（本稿では「関係詞節構文」もしくは単に「関係（詞）節」と呼ぶ）を作れないことを指摘している。そして、その理由については、(1a) では副詞「静かに」は「流れる」を叙述しているのに、(1b) ではこの主述関係が逆転して「流れる」によって「静か」が叙述されているためであるとしている。また、このような副詞の特性をふまえた上で、いわゆる「遊離数量詞」の文法的な扱いについても触れている。

- (2) a. 昨日ここに5人の学生が出席した。  
 b. 昨日ここに学生が5人出席した。  
 c. \*[昨日ここに学生が出席した] 5人
- (3) a. 僕は3冊の本を買った。  
 b. 僕は本を3冊買った。  
 c. \*[僕が本を買った] 3冊

(2b)と(3b)では数量詞「5人」や「3冊」が修飾対象の名詞「学生」や「本」から右方向に離れて生じている((2a)や(3a)は数量詞が被修飾名詞の左隣に生じている例)。このように数量詞(数詞も含めた広義の意味での数量表現)のうち、その被修飾名詞(一般に「先行詞」と呼ばれる)から離れて生じるものを「遊離数量詞」と呼んでいる。奥津は遊離数量詞が(1)のような関係詞節に生起できないことを指摘している((2c)と(3c)を参照)<sup>1)</sup>。この事実をふまえて、奥津は「5人」や「3冊」といった表現は副詞として扱うべきであると提案している。

(1)から(3)のデータを見る限りでは、遊離数量詞を「静かに」と同様に副詞として扱えそうだが、江口(2002)が指摘するようにもともと遊離数量詞は名詞であることをふまえると、連用修飾表現の副詞と全く同一に扱って良いのか疑問が残る。

実際、江口(2002)は遊離数量詞の関係詞節化は可能であると主張している。ただし、関係節によって修飾される名詞(本稿では「主名詞」と呼ぶ<sup>2)</sup>)となる数量表現は「3人」といった具体的な値を表すものではなく、江口の呼ぶところの「スケール」を表す表現(たとえば「人数」)に変えなければならない。

- (4) a. 学生が3人来た。(江口の(6a))  
 b. [学生が来た] 人数(江口の(7))

(4b)が書き言葉で用いられることはまれであると思われるが、話し言

葉で用いられることは十分に予想できるし、その場合に意味解釈ができるという点では容認可能であると考えられる。

興味深いことに、英語には (4b) に対応する形式が存在しない。

- (5) a. Three students came (here yesterday).
- b. The number of the students [who came (here yesterday)].
- c. \*The number [of which students came (here yesterday)].

英語で (4b) に近い文法的な表現を探すとすれば (5b) になる。(5b) は関係節が〈個体〉(人やもの)を限定し、それに the number of (「～の数」) という表現が付加された形式である。このように「〈個体〉を限定する関係節」(以下、「個体限定型」と呼ぶ) は次に示すように日本語でも可能である。

- (6) [昨日ここに来た] 学生の人数

対照的に、(4b) のような「〈個体〉を飛び越えて〈数量〉を限定する関係節」(以下、「数量限定型」と呼ぶ) は日本語では可能だが、英語では許容されない (cf. (5c))。日本語には英語と同様、個体限定型の関係詞節が備わっているにもかかわらず、なぜもう一つの形式、すなわち数量限定型の関係節が存在するのだろうか。同一の意味を表すのであれば、二つの形式は不要であろうから両者には何らかの違いがあるものと思われる。

本稿では (4b) のような数量限定型関係節と (6) のような個体限定型関係節を区別し、前者の特性について考察した上で両者の機能を比較する。以下の議論は次のように構成されている。2 節では、先行研究で観察されている数量限定型の関係節の特性をまとめる。3 節では数量限定型と個体限定型の関係節の相違点を統語論的・意味論的観点から論ずる。4 節では値をもつスケール名詞が数量限定型関係節の主名詞として許容

されない理由を探る。5 節では結論を述べる。

## 2. 先行研究

### 2.1 数量詞遊離構文と数量限定型関係節の類似性

江口 (2002) は (7b) の数量限定型関係節が (7a) の数量詞遊離構文から数量詞を関係節化することによって派生されると主張している。

- (7) a. 学生が3人来た。(= (4a))  
 b. [学生が来た] 人数 (= (4b))

江口は関係節化のプロセスとして次の2段階を認める。

- (8) a. 節内部の一要素を消去する。(江口の (5a))  
 b. 消去された要素を節の後の被修飾要素にする。(江口の (5b))

(7a) にこのプロセスを適用すると、「\*学生が来た3人」という非文法的な表現が生成されてしまう。しかし、(8b) の規則を緩めて「消去された要素」をそのまま被修飾要素（すなわち、主名詞）にするのではなく、「人数」のような「スケール」のみを表す表現に置換すれば (7a) と (7b) の対応関係を保証できる、と江口は主張する。

関係節化の規則を緩めてまでも両者を関係づける根拠として、江口は数量限定型関係節と数量詞遊離構文の類似点を指摘している。以下では3つの主要な類似点をまとめる。第一に、数量限定型関係節に遊離数量詞を追加すると不適格になるという事実がある。

- (9) a. [太郎が寿司を食べた] 量 (江口の (14a))  
 b. \*[太郎が寿司を30個食べた] 量 (江口の (14b))

(8) で見たように、関係節化では主名詞にする要素を節内部から削除しなければならない。(9b) の非文法性は遊離数量詞「30個」が関係節化されて主名詞「量」になったと考えれば自然に導かれるというのである。

第2の類似点は、遊離数量詞が先行詞にとれる名詞の格に関する制約が、そのまま数量限定型の関係節にも当てはまるという事実である。

- (10) a. \*太郎は工具で3つコンピュータを修理した。(江口の  
(15a))  
b. \*[太郎が工具でコンピューターを修理した] 個数 (江口の  
(15b))

遊離数量詞の先行詞になれる名詞の格は、ガ格やヲ格が典型的で、道具のデ格や起点のカラ格にはなりにくいという事実が従来から指摘されている(奥津(1969), Shibatani(1977)など)。(10a)の遊離数量詞「3つ」はデ格名詞「工具」を先行詞とすることはできない。同様に、(10b)の数量限定型関係節で主名詞の「個数」は関係節内の「工具」と関係をもつことはできない。

第3の類似点は、遊離数量詞が名詞句内部の名詞を先行詞にとれないのと同様、数量限定型関係節でも主名詞は関係節内にある名詞句内部の名詞と関係をもてない、という事実である。

- (11) a. \*次郎は[友達ノートを]3人借りている。(江口の  
(17a))  
b. \*[次郎が[友達ノートを]借りている]人数 (江口の  
(17b))

(11a)では遊離数量詞「3人」は「友達ノート」という名詞句内部の「友達」を先行詞とすることはできない。これと並行的に、(11b)の数量限定型関係節でも、主名詞の「人数」は関係節内の当該名詞句と関係

結べない。

以上、数量詞遊離構文と数量限定型関係節の類似点を見た。江口はこれらの類似点を根拠にして、数量限定型関係節が数量詞遊離構文から派生したものであると結論づけている。本稿はこの結論の妥当性については中立的な立場をとるが、両者間に意味的な対応関係があるという指摘については受け入れる。3節で数量限定型関係節と個体限定型関係節の比較をするが、前者には対応する数量詞遊離構文の特性が反映されていると主張する。詳しい議論に入る前に、まずは江口が観察している数量限定型関係節の特性を見ることにする。

## 2.2 数量限定型関係節の特性

すでに見たように、数量限定型関係節の主名詞には、(12b)のような具体的な数量を表す表現は許されず、(12c)のような「値をもたずスケールのみを表す」表現（以下、「スケール名詞」と呼ぶ）が要求される。

- (12) a. 学生が3人来た。(=(4a))  
 b. \*[学生が来た] 3人  
 c. [学生が来た] 人数 (=(4b))

江口は「3人」のような数量詞と「人数」のようなスケール名詞の区別について次のように述べている。「3人」は形態的に「3」という値と「人」というスケール（数え方）の2つの要素に因数分解できる。これに対して、「人数」は値をもたず、スケールのみを表す。ただし、連体修飾をうけるとなんらかの値をもつようになる。(12c)を例にとると、学生が何人か来たという事態があってその人数を指している。一方、次の例のように数量詞「3人」が連体修飾を受けると「3人」は指示的になる。

- (13) [そこにいた] 3人

次の表は「3人」と「人数」の意味機能の対比を表している。

(14) (江口の (24))

	単 独	名詞修飾を受ける
「3人」	スケール+値	指示対象をもつ・
「人数」	スケール	スケール+値

「3人」と「人数」では、後者の意味機能が一段階後退していることがわかる。すなわち、単独で用いられた場合、「3人」は値をもつが、「人数」はもたない。名詞修飾を受けると「人数」は値をもつようになり、単独で用いられた場合の「3人」の意味機能に追いつく。ところが、「3人」が名詞修飾を伴うと今度は指示対象をもつようになる。

(14)の表をふまえると、数量限定型関係節の主名詞になりうる要素は、「単独ではスケールのみを表し、名詞修飾を受けることによって初めて値を得るような表現」(江口(2002:12))ということになる。

以上、本節では数量限定型関係節の特性についてまとめた。次節では、江口の分析で不明確な点を指摘しつつ、より詳細に数量限定型関係節の特性を突き詰めることにする。

### 3. 分 析

#### 3.1 スケール名詞と数量限定型関係節

江口による数量限定型関係節の例では、主名詞として「人数」や「冊数」のように類別詞(江口は「分類辞」と呼んでいる)を含んだスケール名詞が用いられている(量を表すスケール名詞については後でふれる)。江口の容認性判断とは異なり、筆者の内省では次のような差が感じられる。

(15) a. ??[学生が来た] 人数 (= (4b)), ただし容認性判断は筆者



のもの)

b. [学生が来た] 数

筆者の文法直感では主名詞は「人数」のような類別詞を含む表現よりも「数」という裸の表現のほうが明らかにすわりがよい。70名ほどの日本語母国語話者を対象に(15)の容認可能性を調査したところ、江口のように(15a)を全く問題なく容認する話者と筆者と同様、(15b)の方を好む話者に二分された。この事実は、数量限定型関係節において主名詞(スケール名詞)によって数えられている対象は何か、という問いと密接に関わっていると思われる。

本稿では、数量限定型と個体限定型の機能的な役割分担について次の仮説をたてる。

- (16) 数量限定型の関係節は〈事態(eventuality)〉の数を表し、個体限定型の関係節は〈個体(entity)〉の数を表す。

この仮説が正しければ、スケール名詞によって数えられる対象は、それと関連する名詞(〈個体〉)ではなく、その名詞が関わっている〈事態〉そのもの、ということになる。

次の例で具体的に考えてみよう。

- (17) a. [昨日ここに来た] 学生の人数(個体限定型)  
b. [昨日ここに学生が来た] 数(数量限定型)

(17)はそれぞれ個体限定型関係節と数量限定型の関係節である。(17a)では関係節によってどの個体が問題にされているのか決定され(ここでは「学生」)ており、その上で個体の数(人数)が問題にされている。したがって、類別詞を含むスケール名詞が続いても何ら問題が起こらない。これに対して、(17b)では主名詞の「数」は「学生」単独によってでは

なく、「昨日学生がここに来た」という〈事態〉に相当する要素によって限定されている。すなわち、スケール名詞「数」によって数えられる対象は〈個体〉ではなく、〈事態〉であるということになる。結果として、〈個体〉を数える「人数」のような表現はスケール名詞としてすわりが悪く、〈事態〉を数えることも可能な表現の「数」でなければならない（ここで「〈事態〉を数えることも可能な表現」とした理由と（15a）を容認する話者の扱いについてはあとで述べる）。

数量限定型が〈事態〉を数える形式であることは、対応する数量詞遊離構文を考察することによっても確かめられる。

- (18) a. 昨日ここに5人の学生が来た。  
b. 昨日ここに学生が5人来た。

この対は数量詞「5人」が遊離しているかどうかで異なっている。一般に、(18a)は「5人の学生」がグループをなして、ひとまとまりでやって来たという解釈（矢澤（1985）はこれを「同時量読み」と呼ぶ）。これに対して、数量詞遊離構文の(18b)は、学生が個別にやって来てその数が5人に達したという解釈（矢澤（1985）はこれを「達成量読み（分配読み）」と呼ぶ）を受ける。この解釈のもとでは、「5人」という数量詞は〈個体〉の複数性を表すだけでなく、「学生がやって来る」という〈事態〉が5回起こったという〈事態〉の複数性も含意する。

(18)の解釈をまとめると次のようになる。

- (19) a. 同時量読み：学生が5人ひとまとまり（グループ）でやってきた。(18a)  
b. 達成量読み（分配読み）：学生が個別にやってきて合計が5人に達した。(18b)

数量限定型関係節が数量詞遊離構文と意味的な対応関係にあると考え

るなら、当該関係節が、数量詞遊離構文に特有の「達成量読み」を継承していることはごく自然なことである。それでは、「同時量読み」はどうかと言えば、この解釈では〈事態〉よりも〈個体〉の数に焦点が当てられるので、個体限定型関係節がその解釈を引き継ぐことになる。このように〈個体〉に焦点を当てるか、〈事態〉に焦点を当てるかで異なる形式の関係詞節が用意されているのが日本語であると言える。

ここで上述の2つの解釈と現実には起こりうる状況との対応について述べておかなければならない。北原（1996）が指摘しているように、「同時量読み」と「達成量読み」は現実には起こりうる状況の全てを網羅しているわけではない。実際には次のように事態が複数回起こるものの、そこに関わる〈個体〉は単一ではなく、グループをなしているような場合が考えられる。このような解釈を北原は「中間読み」と呼んでいる。

(20) (北原 (1996) の (26))

[学生<sub>1</sub>・学生<sub>2</sub>がここに来る]<sub>E1</sub>

[学生<sub>3</sub>がここに来る]<sub>E2</sub>

[学生<sub>4</sub>・学生<sub>5</sub>がここに来る]<sub>E3</sub>

(学生<sub>n</sub>は〈個体〉の区別を、E<sub>n</sub>は〈出来事〉の区別を表す)。

この場合、〈事態〉の数(回数)は〈個体〉の数(人数)よりも少なくなる。中間読みの可能性を考慮すると、数量詞遊離構文は達成量読みの解釈をうけるという、意味解釈上の特性がばやけてしまうが、重要なのは個体の複数性から事態の複数性が含意されるという点である。

ここであらためて次の例に立ち返ってみる。

(21) [昨日ここに学生が来た] 数 (= (17b))

この関係節は〈事態〉を数える数量限定型の形式だが、それは必ずしも〈個体数〉と〈事態数〉が一对一で対応しているような、限られたケース

(つまり、(19b) の状況) でだけ用いられるのではなく、(20) の状況でも用いられると思われる。結果として、事態に焦点を当てる表現にもかかわらず、当該事態の参与者である〈個体〉の数を数えているような直感が生じるのだろう。そして、これが主名詞のスケール名詞が〈事態〉を数えることも可能な表現でなければならない理由である。〈事態〉を数えるための専用のスケール名詞「回数」では、個体数を数えることは不可能なので、〈事態〉に焦点を当てつつも、〈個体〉の数を数える状況にはうまくそぐわないのである。

江口のように、数量限定型関係節の主名詞として類別詞を含むスケール名詞（たとえば「人数」）を認める話者にとっては、もはや数量限定型関係節が〈事態〉に焦点を当てる形式であるという意味合いが薄れ、個体限定型に相当する機能を担っていると思われる。その結果、主名詞として「人数」のような〈個体〉指向のスケール名詞が抵抗なく受け入れられているのではないだろうか。

これまでではガ格名詞の〈個体〉と〈事態〉が関わる例をみてきた。次節では、数量限定型関係節が〈事態〉に焦点を当てた形式であることがより明示的に示される例として、ヲ格名詞の〈個体〉と〈事態〉が関わるケースを考察する。

### 3.2 数量限定型関係節 vs. 個体限定型関係節

次の例をみてみよう。

#### (22) 大晦日についた鐘の数

この表現では関係節内でヲ格の文法機能を担う名詞（「鐘」）が主名詞になっている。この関係節は構造的に2通りにあいまいで、それぞれの構造に応じて異なる解釈をもつ。その解釈とは「イベント読み」と「個体読み」である。

## (23) a. 個体読み：大晦日についた鐘の個数

統語構造：[<sub>NP</sub> [大晦日についた] 鐘] の数 (個体限定型)

対応する文形式：私は大晦日に2つの鐘をついた。

## b. イベント読み：大晦日に鐘をついた回数

統語構造：[大晦日についた] [<sub>NP</sub> 鐘の数] (数量限定型)

対応する文形式：私は大晦日に鐘を2回ついた。

構造的な観点からみると、(23a) は関係節によって〈個体〉が限定される構造、つまり個体限定型の関係節である。具体的には、関係節が名詞の「鐘」を限定し、そこに「ノ数」という表現が付加されている<sup>3)</sup>。この構造に張り付いた解釈は個体読みで、ついた鐘の個数を問題にする。対応する文形式では主名詞「数」は「2つ」のような数量詞になる。

(23b) の統語構造では関係節が名詞句「鐘の数」、より厳密には名詞句内の主要部 (head) である「数」を修飾おり、数量限定型関係節と見なされる。その解釈は鐘をつく〈事態〉に焦点を当てたイベント読みである。対応する文形式では主名詞「(鐘の) 数」は「2回」のような数量詞で置き換えられる。

次に (23) に対応する数量限定型関係節の例をみてみよう。

## (24) 大晦日に鐘をついた数

この表現では主名詞であるスケール名詞「数」が関係節内の「鐘」と関連している。「数」が「鐘の」という連体修飾を受けていないことを除けば、(23b) で見た構造と全く同じである。ここで重要なのは、(24) の解釈が (23b) のイベント読みになることである。すなわち、(24) では鐘をついた回数のみが問題で、鐘の個数は問題にしていない<sup>4)</sup>。以上をまとめると、次のようになる。

## (25) イベント読み：大晦日に鐘をついた回数

統語構造：[大晦日についた] [<sub>NP</sub> 数]対応する文形式：私は大晦日に鐘を2回ついた<sup>5)</sup>。

(22) と (24) で可能な解釈に差があるという事実から、数量限定型の関係節で主名詞が数えているものは〈個体〉ではなく、〈事態〉であるという、(16) の仮説が支持される。

これまで、個体限定型関係節が〈個体〉に焦点を当てた形式であるのに対して、数量限定型関係節は〈事態〉に焦点を当てた形式であると考えた根拠を見てきた。1節で述べたように、数量限定型の関係節は話し言葉で用いられ、個体限定型の関係節は書き言葉で用いられるのが一般的であるように思われる。実際、インターネットを利用した事例の収集でも数量限定型の実例は限られている。容認可能な表現であるのに実例が少ないという事実が示唆することは何であろうか。そこで数量限定型関係節が用いられる文脈について考えてみたい。

数量限定型が〈事態〉に焦点を当てた表現であるとするれば、〈個体〉の具体的な数よりも、むしろそれによって引き起こされる〈事態〉の数(規模)に焦点が当たる。結果として、意外性や事件性といった意味合いを帯びることになる(小林亜希子氏との私信)。このことは、数量限定型関係節と個体限定型関係節に述部を続けると次のような対立が見られることから支持される<sup>6)</sup>。

## (26) 数量限定型

- a. [女学院大学に学生が来た] (人) 数には驚いた。
- b. [女学院大学に学生が来た] (人) 数は誰も予想しないほど多かった。
- c. \*[女学院大学に学生が来た] (人) 数は30人だった。
- d. ?\*[女学院大学に学生が来た] (人) 数を学校側が公表した。

## (27) 個体限定型

- a. [女学院大学に來た] 学生の人数には驚いた。
- b. [女学院大学に來た] 学生の人数は誰も予想しないほど多かった。
- c. [女学院大学に來た] 学生の人数は30人だった。
- d. [女学院大学に來た] 学生の人数を学校側が公表した。

数量限定型では個体数に言及する述語はすわりが悪く、「予想しないほど～」といった意外性や「～には驚いた」のような〈事態〉に対する評価とみなせる述語が自然である。このように数量限定型は〈事態〉に注目した形式であり、個体限定型に比べて用いられる環境が制限される。また、上の対立は単に個体数だけに言及する場合のデフォルトの形式が、個体限定型であることも示している。

## 3.3 量を表すスケール名詞

これまではスケール名詞が「数」を表す場合を見てきたが、本節ではスケール名詞が「量」を表す場合をについて考察してみたい。

- (28) a. [太郎が寿司を食べた] 量 (= (9a))
- b. [<sub>NP</sub> [太郎が食べた] 寿司] の量

(28a) は数量限定型関係節で (28b) はそれに対応する個体限定型関係節である。以下では解釈上の両者の違いを考えてみたい。「数」のスケール名詞の場合には、数量限定型の関係節では〈事態〉の数を、個体限定型の場合には〈個体〉の数を数えるのであった。このことから類推すると、(28a) はイベント読みになるはずだが、「量」というスケール名詞は直接、〈事態〉を数えることはできない。というのも、〈事態〉は「(回) 数」で数えなければならないからである。

北原 (1996) によれば、「量」は内容量を表す「内容数量詞」であって、

「数」のように個体数を表す「個体数量詞」とは区別される。「量」はあくまでも〈個体〉の量を表しているはずだから、(28a)の数量限定型関係節では関係節の表す〈事態〉を通じて累積した寿司の量を問題にしていると考えられる。この解釈を「累積量読み」と呼ぶことにする。

これに対して、(28b)では関係節は〈個体〉を限定するだけであって、それに付加された「量」というスケール名詞が〈個体〉の内容量に言及する。構造的には関係節と主名詞「寿司」が名詞句(NP)を形成し、それに「～の量」が付加されている。

実は(28b)には次のような構造を与えることも可能である。

(29) [太郎が食べた] [<sub>NP</sub> 寿司の量]

この場合、関係節は名詞句(厳密にはその主要部である「量」)を修飾していることに注意すべきである。結局、この構造は数量限定型ということになる。解釈については「累積量読み」になる。すなわち、太郎が寿司を食べるという事態を通じて累積した寿司の量を指している。

数量限定型と個体限定型の解釈の違いをまとめると次のようになる。

(30) 数量限定型

a. [太郎が寿司を食べた] 量 (= (28a))

b. [太郎が食べた] [<sub>NP</sub> 寿司の量] (= (29))

解釈: 太郎が寿司を食べることで累積された寿司の〈個体量〉  
(累積量読み)

(31) [<sub>NP</sub> [太郎が食べた] 寿司] の量 (= (28b))

解釈: 寿司のうちで太郎が食べた分の〈個体量〉

「寿司を食べる」という述語は、「寿司」が非有界的(unbounded)なので述語タイプとしては活動動詞(Activity Verb)に分類される。次に異なる述語タイプの例を見ることにする。



- (32) a. [金田が(その)コースを走った] 距離  
 b. [[金田が走った] コース] の距離

主名詞が「距離」となっているが、これは「量」のスケール名詞の下位類と見なせる。「コースを走る」という述語は「コース」が有界的(bounded)であるため達成動詞(Accomplishment Verb)となる。この述語タイプでは〈事態〉を通じて累積した〈個体〉の内容量を問題にする「累積量読み」と〈事態〉とは切り離された〈個体〉の属性的な内容量を問題にする解釈の差が明確に浮かび上がる。(32a)の関係節は数量限定型だから累積量読みになる。すなわち、「金田がコースを走る」という事態によって累積した(走行)距離を表している。これに対して、(32b)の関係節は個体限定型で金田が走ったコースが特定されており、そのコースの属性としての距離が問題にされている((29)の寿司の例と同様に、(32b)には[金田が走った]<sub>NP</sub> コースの距離]という統語構造を与えることも可能で、この場合には数量限定型の関係節となり、累積量読みになる)。

これまでスケール名詞が「量」を表す場合について考察してきた。「数」のスケール名詞との違いは、数量限定型の関係節であっても〈事態〉を直接数えるのではなく、関係節の表す〈事態〉を通じて累積した〈個体量〉を問題にする、という点である。スケール名詞が「数」か「量」かによってこのような文法対立が見られるのは、前者は〈個体〉だけでなく〈事態〉も数えられるスケールなのに対して、後者は〈個体〉しか数えられないスケールであることに起因すると思われる。

最後に「数」のスケール名詞と「量」のスケール名詞を比較してみた。次の数量詞遊離構文では、それぞれ個体数量詞の「2本」と内容数量詞の「2ポイント」が先行詞である「ギネス」から遊離している。

- (33) a. 昨夜、ジョンはアイリッシュパブでギネスを2本飲んだ。  
 b. 昨夜、ジョンはアイリッシュパブでギネスを2ポイント

飲んだ。

これらの文形式に対応する関係詞節は次のとおりである。

- (34) a. [[昨夜, ジョンがアイリッシュパブで飲んだ] ギネス]  
の本数  
b. [[昨夜, ジョンがアイリッシュパブで飲んだ] ギネス]  
の量
- (35) a. \*[昨夜, ジョンがアイリッシュパブでギネスを飲んだ] 本  
数  
b. [昨夜, ジョンがアイリッシュパブでギネスを飲んだ] 量

(34) は個体限定型, (35) は数量限定型である<sup>7)</sup>。前者の場合には, 「数」のスケール名詞と「量」のスケール名詞のいずれも問題なく続けられる。これに対して, 数量限定型の関係節の場合には, 「数」のスケール名詞を続けるとすわりが悪くなる。この容認性の低下は, 「??学生が来た人数」の考察で指摘したような, 類別詞「人」が〈事態〉の焦点化を妨げることに起因するものではない。その証拠に (35a) のスケール名詞から類別詞を除去したとしても依然として容認性は回復しない。

- (36) \*[昨夜, ジョンがアイリッシュパブでギネスを飲んだ] 数

「数」のスケール名詞と「量」のスケール名詞でこのような容認性の対立が生じるのはどうしてだろうか。これは関係節の表す〈事態〉の特性によるものと思われる。すなわち, 「ギネスを飲む」という事態はギネスのびんの本数で計量されるものではない。この点で, 先に見た「学生がここに来る」とか「大晦日に鐘をつく」といった事態とは本質が異なる。つまり, 通常, わたしたちはギネスを2本飲むか4本飲むかで事態が2倍になるといった認識をもたない。むしろ, ギネスを飲むという〈事

態〉を通じて累積したギネスの量を問題にするほうが自然である。したがって、数量限定型の形式では「量」のスケール名詞が選ばれるものと思われる。これに対して、個体限定型関係節では関係節によって〈個体〉が決定されるだけなので、そのあとで「数」に言及しようが、「量」に言及しようが問題が生じないのである。

#### 4. 数量限定型関係詞節と遊離数量詞構文

本節では、次のように数量限定型関係節が主名詞として「3人」のような値をもつスケール名詞をとることができない理由を考えてみたい。

(37) \*[学生が来た] 3人 (= (12b))

江口によればこの事実は次のように説明される。

(38) 関係節によって修飾されると指示対象を持つ表現となり、数量を表す表現でなくなり、遊離数量詞のもつ本来の機能がそのまま継承されないのである。(pp. 11-12)

「遊離数量詞の本来の機能」が何であるのか不明確だが、この説明には、①遊離数量詞は指示的になってはいけない、②関係節の主名詞の位置に遊離数量詞が生じると指示的になる、という2つの前提があると思われる。②はおそらく、江口自身が指摘している (39a) のデータを根拠にしているものと思われる。

- (39) a. 僕は3冊を買った。→ [僕が買った] 3冊 (江口の (11a))  
 b. 僕は本を3冊買った。

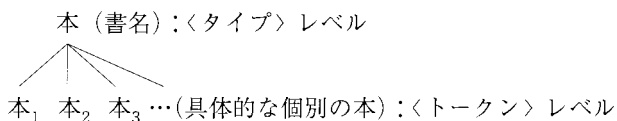
確かに (39a) の [僕が買った] 3冊では主名詞「3冊」は指示的になっているが、そもそも対応する文形式でも「3冊」は指示的になっており、(39b) に含まれる遊離数量詞の「3冊」とは異なる。したがって、遊離数量詞が主名詞の位置に生じると指示的になるという独立した証拠にはならない。このことから (37) の非文法性が遊離数量詞が指示的になったことによるものなのか断定できないという結論に達する。以下では、関係節の意味機能の側面から (37) の非文法性の説明を試みる。

まず、(39b) から次のような関係節を作ることが可能である。

(40) [僕が3冊買った] 本 cf. \*[僕が本を買った] 3冊

(39b) における「本」と「3冊」の関係はタイプトークンの関係（つまり、書名と具体的な個別の本の関係）になっている。この関係は次のようなタイプ階層 (Type Hierarchy) によって表される。

(41) 「本」のタイプ階層



この階層と関係節の制限機能——指示対象に制限を加える——を併せて考えると、関係節内で<トークン>に言及することで、主名詞のタイプを決定するという型しか許されないことになる。

(41) からわかるように、<タイプ>のレベルの「本」(書名)は<トークン>のレベルである「冊」よりも上位の概念であるから、「書名」に言及しても<トークン>を決めることはできない。たとえば、『指輪物語』という書名 (<タイプ>のレベル) が与えられても、「冊」のレベルに相当する具体的な本は無数に存在するため、どの<トークン>を指すかは決まらない。逆に、具体的な個別の本が決定されると、その書名は自動

的に決まる。このようなタイプ階層上の一方向的な関係が与えられると、遊離数量詞（〈トークン〉）とその先行詞（〈タイプ〉）が関係詞節構文に出現する場合は、必然的に〈トークン〉が関係節の中、主名詞が〈タイプ〉というパタンになる。以上から、\*「僕が本を買った」3冊の非文法性が導かれる。

## 5. 結 論

本稿では江口（2002）が「遊離数量詞の関係節化」として扱った関係節について、その統語的・意味的特性を考察した。主な主張を以下にまとめる。

- ① 数量限定型関係節は〈事態〉に焦点を当てる形式なのに対して、個体限定型関係節は〈個体〉に焦点を当てる形式である。
- ② 数量限定型の関係節であっても関係節の表す〈事態〉の特性によっては個体限定型のような解釈を与えられることがある。
- ③ 数量限定型の関係節では〈個体〉よりも、それが関わる〈事態〉に焦点が当てられるため、当該事態の意外性や事件性を表す述語と相性がよい。
- ④ 数量限定型関係節の主名詞に「量」のスケール名詞が生じた場合、「数」のスケール名詞の場合とは違って、〈事態〉を通じて累積した〈個体〉の量を問題にする。
- ⑤ 数量限定型関係節の主名詞として値をもつスケール名詞が許容されない事実は、スケール名詞とそれが関係する関係節内の名詞のタイプ階層での上下関係と関係節の制限機能の相関によって説明される。

## 注

- 1) 奥津が指摘しているように、遊離数量詞をそのまま関係節化することは不可能であるが、これは遊離数量詞が関係詞節構造に生起できないということであ

はない。たとえば、(3a) から次のような関係節を作ることは可能である。

(i) [僕が3冊買った] 本

この場合、関係節化されているのは遊離数量詞の「3冊」ではなく、被修飾名詞の「本」である。ここでは奥津が(1)で指摘しているような主従関係の逆転は見られない。すなわち、「3冊」は「本」を修飾する要素として関係詞節の中に生じている。関係詞節と「本」の関係は連体修飾節と被修飾句の関係であるから修飾の主述関係は保持されている。(i) のような構造については4節で扱う。また、田中(2003)でその特性について詳細に論じているのでそちらも参照されたい。

- 2) 英語では関係節によって修飾される名詞を「先行詞」と呼ぶが、これは被修飾名詞が関係節に先行するという統語的特性に基づいた用語である。日本語では、関係節と被修飾名詞の順番が英語のそれと逆転するため、「底の名詞」(寺村1975)、「主名詞」(井上1976)などと呼ばれる。本稿では「先行詞」という用語を遊離数量詞によって修飾される名詞を指すのに用いるので混同しないように注意されたい。
- 3) ここではついた鐘の個数だけが問題にされているのでついた回数については必ずしも〈個数〉と対応しなくてもかまわない。たとえば、2個の鐘をついた場合、それぞれ1回ずつつけばついた回数の値も2となるが、1つの鐘を1回、もう一つの鐘を2回ついたとしても、ついた鐘の個数は依然として2個となることに注意しなければならない。
- 4) もちろん〈事態〉と〈個体〉を対応させることが可能であるから、たとえば鐘をつく事態が2回あれば、それぞれ事態で別の鐘をつく状況を想定できる。その場合の鐘の〈個体数〉は2となる。この解釈ではどの鐘をついたかについては関心がなく、何回ついたかに焦点が当てられている。
- 5) (25) ではヲ格名詞と〈事態〉の関わりに注目するために、対応する文形式では主語を定名詞の「私」にしてある。もし、(24) の関係節内の主語が「参拝客」のような不定名詞であれば、(21) でみた解釈の曖昧性が生じることになる。

(i) [参拝客が大晦日に鐘をついた] {数/??人数}

この表現は鐘をついた回数を問題にする「イベント読み」に加えて、参拝客が鐘をついたという事態の数を問題にする「イベント読み」も可能である。後者の解釈では、鐘をついた回数は問題ではなく、鐘をつくという事態に参加した参拝客が何人いたかが問題になっている。この解釈は〈事態数〉と〈個体数〉が一致する場合だけでなく、ずれる状況にも用いられるため、〈個体〉に焦点を当てた個体限定型の関係節の解釈に近くなると思われる。

- (ii) [大晦日に鐘をついた] 参拝客の {数/人数}
- 6) (26)–(27) のデータは修道大学の小林亜希子氏から頂いた。著者の内省では、関係詞節の主名詞 (スケール名詞) が「人数」のように類別詞を含むとすわりが悪いが、それを取り除けば小林氏の容認性判断と同じになる。
- 7) (34) は個体限定型の構造だが、次のように「ギネスの本数」と「ギネスの量」を名詞句とし、その主要部に関係節がかかる統語構造を想定することもできる。ただし、この場合には数量限定型関係節として解釈される。
- (i) a. [昨夜, ジョンがアイリッシュバブで飲んだ] [<sub>NP</sub> ギネスの本数]  
 b. [昨夜, ジョンがアイリッシュバブで飲んだ] [<sub>NP</sub> ギネスの量]

## 参 考 文 献

- 江口 正 (2002) 「遊離数量詞の関係節化」『人文論叢』33, 2147–2167, 福岡大学.
- 井上和子 (1976) 『変形文法と日本語・上』, 大修館.
- 北原博雄 (1996) 「連用用法における個体数量詞と内容数量詞」『国語学』186, 29–42.
- 奥津敬一郎 (1969) 「数量的表現の文法」『日本語教育』14, 42–60.
- 奥津敬一郎 (1974) 『生成日本文法論』, 大修館.
- Shibatani, Masayoshi (1977) “Grammatical Relations and Surface Cases.” *Language* 53, 789–809.
- 田中秀毅 (2003) 「部分構造と関係詞節に共通する機能について」森あおい他『英語世界のナビゲーション』167–209, 青踏社.
- 寺村秀夫 (1975) 「連体修飾のシンタクスと意味—その1—」『日本語・日本文化』4号, 大阪外国語大学留学生別科, 寺村秀夫 (1993) に再録.
- 寺村秀夫 (1993) 『寺村秀夫論文集 I —日本語文法編—』, くろしお出版.
- 矢澤真人 (1985) 「連用修飾成分の位置に出現する数量詞について」『学習院女子短期大学紀要』18, 96–112.